

腐った目の実力者

癒しを求めるもの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作とは少し違った比企谷八幡が高度育成高等学校に入学する。

八幡がハーレム気味になりますが…魅力的なキャラが多すぎてこまるんじや…！

一応pixivにも投稿しています。

目次

比企谷八幡と椎名ひより

静かに走行するバスの中で、俺、比企谷八幡は移り行く景色を眺めていた。

まだ町中を走っているこのバスの目的地はとある海辺。人工島に建設された巨大な学校に向かって早朝から運行している。

高度育成高等学校

就職、進学率共にほぼ100%を誇る全国屈指の名門校だ。

まるでブラック企業のキャッチコピーだがそこは政府公認の国立高校。嘘の可能性は低い。実際に、高度育成高等学校は人工島に位置し、その周りには高校生が生活に困らないショッピングモールは勿論、レジャー施設や映画館などの娯楽施設も充実しているそうだ。

しかし、入学から卒業までの三年間は外部との連絡は例外を除いて一切できない。外出することもできないことを鑑みると納得できる設備の数々だが、莫大な税金を投入されたこの学校に俺が入学することが今でも不思議だ。

可愛い可愛い妹の小町の勧めで何故か受験して何故か面接を含め合格したわけだが、この学校の判断基準が全くわからん。後は小町の今朝の様子だ。まるで何年も引きこもったニートを家から追い出したような清々しい笑顔だった。厄介払いされたわけじゃないよね？そして俺は専業主夫志望で決してニートではない。え、同じだって？違うはずだ、多分。

しかし、なんだかんだ早起きしてお兄ちゃんを送り出してくれたことは八幡的にポイント高い。うん、自分でやっていてキモイな、やめよう。

そんなことを考えていると一人でふひつと笑いが漏れた。独特な赤いブレザーが目立つ中、さらに目が濁った男が一人で笑うのはどうやら不気味らしい。二人席の片方に座っている俺の周りの人たちが一歩下がってしまった。

内心傷つきながらも、意識を変えるべく新品の鞆の中に突っ込んでいた文庫本を取り出して大人しく読書に勤しむことにした。心なし

かピンと上を向いていたアホ毛が弱弱しくなっている気がするが、今は読書に専念しよう。

暫くするといくつかのバス停に停車した。中には俺と同じブレザーを着用している生徒も見られたが、誰一人俺の隣には座ってこない。おかしいな、立っている人いるのに…

またバス停に到着したのか、バスがゆっくり止まった。乗車する人達の姿がちらりと窓辺から見えたが、今回も誰も隣に座らないだろうと入学式前なのに気分は下がりっぱなしだ。

こつこつと移動する足音が聞こえる中、透き通ったような声が響いた。

「あの、隣、座ってもいいでしょうか」

視線が手元に向いているため正確にはわからないが、どうやら近くの人間に相席を求めているようだ。あれ？席はどこもあいてないのでは？と考えたその時だった。

「読書中に申し訳ないのですが、隣に座ってもよろしいですか？」

ふわりとした女性特有の甘い匂いが鼻腔を擦り、ゆつたりとしたカーブのかかった可憐な銀髪が視線の端に映った。

びくりと肩を上げて声の方向を見ると、穏やかな目をした美少女と視線が交差した。

どうやら声をかけられていたのは俺だったらしい。確かに、空いている席は俺の隣しかなかったな。何それイジメ？八幡悲しい。

俺が固まっている中、銀髪の美少女は首を傾げながらも俺からの返答を静かに待っているようだ。

バスももうすぐ出発する。早く答えないと目の前の少女は動かないだろう。同じブレザーから察するに同級生なはずだ。下手に話しかけるとこれからの高校生活はお終いだろうと一人決意しながら言葉を発した。

「…ま、まあ。お前がいいなら座れば？」

…いきなり噛んで、そして挙動不審になりながらもなんとか言葉に表せた。

普通にどうぞと言うのではなく相手に選択を任せるあたり、俺の性

格が窺えてしまう。

しまった。これで『腐った目の男子生徒Ⅱきもい』という噂が広がってしまうのではないかと想像していると、少女はニコリと笑って「ありがとうございます。」とだけ伝え、躊躇なく隣に腰かけた。

…この人、めっちゃくちゃいい人では？と俺に対しての嫌悪感が全くない少女を見ると、またしても目が合った。不味い、今度こそ気味悪く思われた。

「…気になるのですか？」

な、何を、と内心動揺していると、少女は手に持っていたらしい小説を胸元に掲げた。

「この本です。新作なのですが、知っているということはやはり相当な読書家なのですな」

まるで同士を見つけたように瞳を輝かせる少女は若干早口で言った。

確かに、少女が持つ本を俺は知っている。書店で見つけたら購入しようと考えていた、あまりメジャーではない作家の新作だ。

濁った眼のせいで視線の先が分からなかったか、何度も声をかけたのに気付かなかったことを俺が読書に熱中していたと思ったのか、様々な勘違いの結果が美少女の言葉だろう。このまま会話を途切れさせる方が悪手なため、今はその勘違いに乗じて話を合わせよう。

「…いや、偶々知っていただけだ。」

「ですが、今読んでいらつしやる本を見るにお好きですよ。本。」

「ま、まあ、暇なときは大体本を読んで過ごしているからな。」

きらきらとした目で「私もです！」と語る少女は、それはそれは楽しんで好きなジャンルや作者、お気に入りの本は何か質問してくる。バスのマナーを守って俺にだけ聞こえるような音量で話しているが、そうなると必然的に距離が近くなる。触れている肩を意識を持っていかれているため正直に少女の質問に答えている俺がいた。

「あ、忘れていました。私の名前は椎名ひよりです。お名前を聞いても宜しいでしょうか？」

話の途中に少女——椎名ひよりは自己紹介を求めてきた。

面接の時に何年かぶりに名前を聞かれたことに感激したことを思い出したからか、はたまた椎名ひよりの人間性によるものか。最初とは違ったらしくない笑みを浮かべながら、椎名の問いかけに答えた。「…比企谷八幡だ。宜しく。」

「はいっ。宜しくお願いします、比企谷君。」

純粋なその視線に慣れていない俺は長らく見ていなかった窓の外の景色に視線を移した。外には朝日に照らされ銀色に輝く海とともに、そこに浮かぶ多くの建物があつた。巨大な人工島に近づくにつれ、同じバスに乗っていた同級生たちは緊張してか固唾を呑むように静かになったが、椎名だけはこちらを向いて笑顔を浮かべている。

こうして、俺は椎名ひよりと共に高度育成高等学校に足を踏み入れた。

学校名が堂々と示された校門の前にバスは止まり、乗客の高校生が降りていく。俺と椎名は最後尾で降りて、人の流れに沿って歩いてた。

入学式もまだ終わっていないこのタイミングで男女並んで歩いているせいか視線を感じるが、まだ、悪意があるものは感じない。しかし、居心地が悪いことは変わりないが、隣にいる椎名は終始笑顔のため、離れて歩くことを提案することができずに今に至る。

「入学式の前に各々に配属された教室に向かうとパンフレットに書いてありましたが…あそこの掲示板に記載されているのでしょうか」

パンフレットを片手に、椎名は人混みがある方へ顔を向ける。

「おそろくな。さっさと名前見つけて移動するぞ。」

「そうですね。あまり人が多いところは得意じゃないので。」

俺の提案に椎名は本当に苦手そうに答えた。

話して分かったことだが、椎名は見た目の印象通りに物静かなタイプだ。唯一、好きな読書に関しては情熱的に話そうとするが、基本的に静かな空間を好むだろう。俺も同じ立場であるが、自然と静かな場所に追いやられた俺とは違って、しっかりとした理由をもっているこ

とは大きく違う。バスの中然り現在も視線を少数だが集めているにも関わらず動じないあたり、椎名の心の強さを窺える。

「……………」

そんな椎名とは対極に位置するような小心者の俺は学校の敷地内に入った瞬間から警戒してしまう。ここにきて何度も防犯カメラを見かけるからだ。

この学校は政府公認の国立高校とはいえ、ただ受験に合格した生徒のためとは思えないくらい設備の良さだ。

悪さをする生徒がいなか見張るためか、あるいは他にも理由があるのか……

「…比企谷君、どうしたのですか？」

「ん？あ、ああ。何もなし。ちよつと緊張しているだけだ。」

「比企谷もですか。私も比企谷君と同じクラスなのか緊張してます。」

「ああ、そうだな。俺も…………。ん？椎名、今なんて言った？」

俺が周りばかり気にしていることに気付いた椎名は心配そうに顔を覗き込んできた。

整った顔が近づいてきたことに動揺して適当に返してしまった。しかし、椎名の発言に思わず聞き返した俺は悪くない。

「？私も比企谷君と同じクラスなのか緊張していると仰いましたが。」
「どうやら聞き間違いじゃないようだ。俺と同じクラスなのか緊張している？それってつまり俺と同じクラスになりたいと言うこと。」

まさか椎名、まだ出会って数十分だが俺のことを——

「比企谷君は初めてできたお友達です。だから一緒に本を読みたくて一緒にクラスがいいと思いましたが…だめ、ですか？」

——違ったようだ。危ない危ない。椎名の言葉があと少し遅れていたら中学の俺なら告ってフラれている自信がある。…結局フラれちゃうのか、俺。

煩惱だらけの俺とは違い、椎名は純粋に友達…いや、読書仲間と一緒にの方が何かと都合がいいからだろう。

「…別に、だめじゃないだろ。ただクラス分けは俺がしたんじゃないからな？違っても文句言うなよ」

「…ふふっ、そうですね。では学校に怒っちゃいますね？」

不安そうにこちらを見ている椎名にそう返したら、次の瞬間には優しく微笑んだ。

なんだこの癒しパワーは。これは大天使コマチエルに匹敵しうる力だ。新しい天使ヒヨリエルの誕生だ。

一人癒されていると掲示板前の人だかりが減っていた。少しずつ前に進んで、やっと名前が見える位置に来た。

「俺は…Dクラスだな。」

「私はCクラスのようにです。…一緒じゃなかったですね。」

それぞれの学年は四クラスで編成され、生徒はAからDクラスに振り分けられる。

順序で考えるならば隣同士であるが、別クラスとなるとその違いは大きい。ずっと仲良くしてね！とクラス分けの前は手を取って話していたが、数週間後にはそれぞれのグループに分かれて話さなくなるのを俺はよく見てきた。勿論、外側から。

だから、いざ自分が似た立場に置かれたとしても、どうすればいいかなんてわかるはずがない。

ましてや、俺のような人間と関わるよりクラスの連中に馴染むよう勧めることが椎名のこれからのことを考えると適切だろう。今、「じゃあ、行くか」と何事もなく言えばいい。そうすれば椎名との関係は途絶え、この広大な学校の中で偶然会っても気まずい雰囲気になり、会釈をするかしないかの関係に留まる。

プロのぼっちである俺からすればその関係は本来あるべきはずのもので、彼女にとっても、一番望ましい形に納まる。

しかし。

「…あ、あの…比企谷君……」

先程の威勢はどこに行っただのか。きゅつと裾を握って何かを伝えようとしているが躊躇っていることが馬鹿でも分かる。

はあ、と溜息が出る。後ろ髪をがしと掻く仕草に椎名は一瞬びっくりとしたが、それを無視して俺は言った。

「…この学校、図書室とかデカいらしいな。椎名がよければだが、そ

の、暇なときでも行くか？」

誰かに押し付けられることは多々あったが、望まれることは全くない。それこと小町にもお願いはされるが椎名のようなここまで切羽詰まった様子は見せたことはない。

慣れないながらたどたどしく言葉を紡いでいくと、椎名は見た中で一番の笑みを浮かべて言った。

「はいっ。此処にはたくさん施設があるのでいっぱい行きましょう。」

満面の笑みで椎名は豪語するが、何か話が変わってませんか？俺が誘ったのは図書室に行くことだけなんだが：

しかし嬉しそうな椎名に口を挟むことができず、今日の放課後に図書室に行く約束を取り決められ、椎名は一年Cクラスに、俺は一年Dクラスの教室に向かった。